佐藤直方『講學鞭策録講義』解読（一）

―解題、及び、序・第一条より第二十条に至る―

小路口　聡・黒田祐介

はじめに

本資料は、江戸期の崎門の学者佐藤直方が、朱熹の資料をどのように読み、どのように理解し、そして、どのように伝えていたかを知る上で、思想史的資源として、かつ、哲学資源としても、極めて貴重で興味深い資料と思われる。本資料『講學鞭策録講義』は、後述するように、朱熹が「為学の綱要」について述べた言説を編集した『講學鞭策録』を、忠実に理解することを目指して、詳細に解説した佐藤自身の講義ノートである。それは、講義という性格上、聞き手への理解の手助けとなるように、学者向けの難解な語彙を駆使した哲学書ではなく、極めて卑近な例を挙げながら、当時の俗語を用いた口語体で書かれた朱子学の指南書である。経書の引用が随処にちりばめられた、思想史的にも、哲学的にも難解な朱熹のテクストを、日本の歴史上の名立たる人物や事件――例えば、楠や義経や信玄や明智が登場し、湊川や鵯越や平治の乱や切支丹弾圧などが登場する――に擬えて説くなどの工夫を凝らし、身近な問題として理解できるように説かれている。本資料は、単に朱子学理解の解説書として、また、佐藤直方研究の一次資料としてのみならず、当時の時代、社会世相、そして、その時代を生きた江戸の知識人の精神世界を映し出す鑑としても、極めて貴重で、興味深い史料であると考える。

ただ、原文は、漢字カナ交じり文で記されたものであるため、必ずしも誰でもが容易に判読・通読できるものではない。そこで、読みやすさを考慮して、カナを平仮名に直し、歴史的仮名遣いを現代的仮名遣いに改め、漢字を多用するなどした。よって厳密に言えば、元テキストの忠実な「翻刻」とは言えない。あえて「解読」と題した所以である。何分、江戸の思想史に関しては、初心者であり、間違いや誤読も多々あるかと思う。ご批正賜れば、幸甚である。

また、東洋大学大学院文学研究科院中国哲学専攻の大学院生を中心とした研究班（東洋大学『講學鞭策録』会読班）は、これまで三年にわたって、佐藤直方の『講學鞭策録』を大学院の演習で会読してきた。もとより、その際、佐藤自身の講義録は、何よりも最良の座右の参考書であった。『講學鞭策録』については、すでに、『白山中国学』

通巻27・28号（二〇二一・二〇二二）において、その会読の成果を訳注として発表しており、現在も継続中である。本稿は、その副産物にすぎない。今回、佐藤自身の講義の方も、あわせて解読して、『東洋学研究』で発表することで、本資料の思想史的資源としての価値を世に問いたいと思う。

佐藤直方について

佐藤直方は慶安三年（一六五〇）、備後福山に生まれ、享保四年（一七一九）に没した。二十二才頃、山崎闇斎の門に入り、優れた才智によって寵遇を受け、後に崎門學派「三傑」の一人として日本儒学史に名を留める。佐藤の著述は、『韞蔵録』中にまとめて収められているが、そのうち最も門人弟子に尊ばれたのは『講学鞭策録』〈一六八三〉、『排釈録』〈一六八五〉、『鬼神集説』〈一六八九〉、『道学標的』〈一七一二〉の、所謂「藤門の四部書」である。その著作は、日本古典学会編纂『佐藤直方全集』（全三冊）で見ることができる。

『講学鞭策録』について

『講学鞭策録』は、彼が天和三年三十四才の夏、槇七郎左衛門の求めに応じて、美濃文珠村に赴き、ここで『朱子文集』『朱子語類』中から為学の綱要に関する語を摘録編纂したものである。佐藤自ら、『跋講學鞭策録』に、

学を為すの方、朱子之を明らかにする、至れり盡せり。今、其の要を究めて之を擧ぐるに、敬義の兩字に過ぎずして、日新の功、上達の效に至りては、則ち全く積累習熟に在るのみなり。頃日、略ぼ其の尤も確實緊切なる者を掇い、集次して一編と為す。然るに學者、志先ず立たざれば、則ち千言萬語皆な無用の贅なるのみ。尚お何ぞ學これを議す可けんや。故に又た志を立つの一節を最首に冠し、以て觀省儆戒の資に備うるなり。先生嘗て言有り、「卷を開けば便ち聖賢と相似ざる處有り、豈に自ら鞭策せざる可けんや」と。吾輩宜しく深く思を致すべき所なり。

と述べる様に、朱子が明らかにした「爲學の方」の「要」である「敬義」について説いた言葉の中から、その「確実緊切」なるものを拾い集めて編集整理して一編とし、その巻首に、「立志」の一節を冠し、「観省儆戒の資」に備えたものである。

『講学鞭策録講義』について

天和二年（一六八三）三三歳の年に、山崎闇斎が没す。その翌年、三四歳の夏、後に四部書と呼ばれる四首の刊本の首めに位置する『講學鞭策録』が成る。これは、前述の通り、槇七郎左衛門の為に、その宰地美濃の文殊村に趨き、そこで「為學の綱要」について述べた朱子

の語を輯めたものである。本講義の浅見絅斎の序にも、「さて此の編集したからが、自身の了簡を書いたではない。皆朱子の語で、朝夕講究した中で、精しくはっきりとした語をあつめた。」とあるように、佐藤直方自身の考えを述べたものではなく、すべて朱子の語の中から、自ら朝な夕なに講究することを通して、精しくはっきり了解した語を集めたものである。佐藤直方門下では、『講学鞭策録』をテキストとして用いた講義が多く行われたようで、有名なものは、稲葉黙齋の講義録が残されている（東大総合図書館保存庫蔵・九州大学楠本碩水文庫蔵など）。

凡例

一、本稿は、崎門の三傑に数えられた佐藤直方（一六五〇―一七一九）が、朱熹の書中より「学術の綱要」に関するものを編輯して一巻とした『講學鞭策録』の講義録を翻刻（解読）したものである。

一、日本古典学会編纂『増訂 佐藤直方全集』（ぺりかん社、昭和五十四年刊）の巻三に所収の「講學鞭策録講義」を底本とした。なお、池上幸二郎の解説によれば、本講義は、「直方先生の自著自講で、姫路から伝わったもの」で、「田原坦庵先生の自写本」を影印したものである。

一、底本は、漢字カタカナ交じり文である。翻刻するにあたっては、読みやすさを考慮して、漢字仮名まじり文に改めた。また、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改め、濁点も付した。漢字は、原則として、旧字を新字に改め、送り仮名を補ったものもある。異体字については、標準字体に改めた。さらに、カナで表記されている文字も、読解の便宜をはかるために、できるだけ適当な漢字に改めた。

一、原文は読点のみだが、読みやすさを考慮して、適宜、文脈に即して、読点を句点に改めた。

一、判読不能の文字については、■を当てた。

一、底本には、『講學鞭策録』原文は付いていないが、参照の便を考えて、講義の頭に原文を掲載した。その上で、講義の箇所が分かるように、原文の該当部分を「*」で示しておいた。

一、分かりにくい古語・語彙には、簡単な語釈を付した。語釈は、『岩波古語辞典　補訂版』（岩波書店、一九九〇年）、大槻文彦『言海』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇四）、佐藤宏『精選版 日本国語大辞典』（小学館、二〇〇六）、松村明『大辞林 第三版』（三省堂、二〇〇六）、松村明、山口明穂、和田利政『旺文社 古語辞典』（旺文社、一九六〇）、新村出『広辞苑 第七版』（岩波書店、二〇一八）などを参照した。

講學鞭策録序

邇者佐藤丈撮朱子書中關學術綱要者、輯爲一巻。首以*立志之本、繼之以*操存精義之方、*習慣積熟之致、而*以好學論終諸。*題曰講學鞭策録。書已*繕寫、*亟謂余以爲、*此書之編非他也、*聖學之道、朱子所以教人闡明備密、無復遺蘊矣。*然朱子已没、學術*浸乖、不特詖淫妖妄之説競起、而*雖稱從事于朱子者、夷考其所以爲學、則往往不免與平日之訓背馳矛盾。*大率高明疏敏者、每厭檢束涵養之實而不務、*渾厚淳質者、又廢博攷審覈之功而不力、*由乎資質所得已如此、而其意智所熟、*日見其趣。是以、*不務者遂離規矩而到乎恣睢、不力者益趨省約而*安于固陋。*其他不可枚舉。以至於一言之是非一義之取舍向背從違、亦*各有所主而甚者、至門專其學、徒阿所好、安排造爲、瞞人自誣、兩無所得而後已矣。是正自古之可患者、而近世爲尤甚。*以故、竊不自量、*収録日夕所講究精確詳的尤切于用力者如此。以*欲出入起居携持奉誦以爲終身之箴。*至於同志之共是患者、即亦以此*因事對證、反復辨析以一其歸焉、則將不須強辯多説、而彼此交明、自無所容*夫資質之偏、意智之私也。*是乃今日編録之意、尚*恐後日之或忘。盍爲吾識之篇端也。（「*」を付した太字は、講義の見だし語。以下同じ。）

序

立志　これが学をするいつちの本ぞ。何事をすると云うても、いでと思うて奮発せねば役に立たぬ。況んや聖人の道を学ぶと云うは、是れが無うてはどうもならぬ。たとへば、足腰たたぬ様な老人でも、此の度は是非是非槍合わせてと思うなれば、よろばうても、戦場へ出るぞ。手足達者な若い者でも、いでと思う心無いと、何の役に立たぬ様なものぞ。

○**いっち**＝第一の。　○**いで**＝思い立つ時に発する声。いざ。
○**槍合わせ**＝敵味方が槍で戦うこと。日葡辞書（1603-04）（日国）
○**よろばう**＝ヨロヨロ歩く

操存　存養主静のことで、敬のことぞ。孟子の字也。心のうろりとせぬ様にすること、何ほど其の芸に達した者でも、心がちらちらしては役に立たぬ。芸はちっと鈍うても、筋思い込みてすると、上手にも負けぬぞ。

○**うろり**＝うろたえ、気抜けしたさま（岩波）　○**筋**＝直路の意かと云う（言海）。ひたすら。

精義　大学で当てれば格物致知のことぞ。今時、無学なものでも、人のことを言わせて、聞いては中々きことぞ。手前のことになっては勝手ぞ、聖経を考うれば精なる故、同じことでも違うたことぞ。

○**中々き**＝中々しげ。もっともらしい（岩波）

習慣――それほどけっこうなことでも、ひたと慣れて熟すると云うでなければ、用ないぞ。

○**それほど**＝物事の状態や様子が、そこに示されているぐらいの程度であること。多く、強調の気持をこめて、その物事の状態や程度が甚だしい事、この上ないことを表わす。（日国）　○**けっこう**＝立派なこと、見事なこと（岩波古語）　○**ひたと**＝ひたすら

以好學論終――此書のいつちしまいに好学論で終わった。天地の間に学問の仕様のよいと云うに、顔子より外はない。今日、学ぶ者は、又、顔子を目当て、あの様にと思うゆえ、好学論で終わる。好学論は、伊川の書かれて、顔子の学の仕様を書いた。いかなる者でも目当てでする。たとえば下手でも、ねらう処は的の黒星ぞ。上手（じょうず）のねらうとても黒星ぞ。ちょうどそれと同じ。畢竟学をしても、顔子へ詰めぬと役に立たぬ。顔子は学問で、ついに聖人になった。

○**いつちしまい**＝一番最後。　○**好学論**＝北宋の程頤（字は正叔、号は伊川）の「顔子所好何學論」（『河南程氏文集』巻第八・伊川先生文四に所収。『二程集』中華書局、五七七頁）　○**仕様**＝方法・やり方。

題　名付けると云うこと。

繕寫　書物出来て清書済みて、

亟謂余――書出来るとそのまま安正方へもたせてやって、此の書を編んだには、深い思い入れがある。其の段はこうこうと、口上に云うてやった。其の言をここに載せたもの。

○**安正**＝浅見絅斎（一六五二―一七一二）の諱。佐藤直方と共に崎門三傑の一人。直方の依頼で、本講義の序文を執筆。

此書之編非他、これから其のことを云う。此の書を編んだは、別に物好きでするでもない。深い意思あればなり。

聖學之道――聖学のいきすぢ、何に不足なく、どこに胡乱なことの無いように、朱子のしておかれて、ちっとも残ったことないを、もそっと云うておかれそうなものじゃと云う様なことはない。然るに、今時、朱子などを、とかくと云うものは、ちょうど日月をもそっと大きくば良かろうと云う様なものぞ。其の様なものは、どうもししょうようはない。

○**いきすじ**＝息筋。力を入れて顔に筋を出す。精を出して物事をする。また、力のありそうな様子をする。いきり立つ。（日国）（息筋を張る＝一生懸命に力を出す。努力して物事をする。（岩波古語）。あるいは、「工夫」のことか？　生き筋？　行き筋？　○**どうもししょうようはない**＝不明であるが、講義の他の条に類似の表現が頻出する。どうしようもないの意か。

然朱子已没――それほど朱子の手を入れておかれたなれば、よくあろうことじゃに、かなしいは、朱子没しての後、朱門からが、はやとりそこのうた。元・明へ至っては、いろいろ悪うなって、ちょうど釈迦の法が、後に八宗と云うように、いろいろになったと同じ。これは釈迦の本意ではないはずぞ。

○**八宗**＝平安時代に広く行われた、仏教の八つの宗派。すなわち、倶舎・成実・律・法相・山論・華厳の南都六宗に、天台・真言を加えた者の総称。八家。（日国）

浸、**寖**と通用、そろそろと云うこと。

○**そろそろ**＝ある状態に向かって徐々に進行するさまを表わす語。次第次第に。少しずつ。だんだんと。おいおい。（日国）

雖稱――そのような異学の分は是非も無し。さしあたって朱子学じゃと云うものが皆違うぞ。其の生き方を見れば、いろいろに違うていく色にもなった。此の段が歎かしうて、此の書を編んだ。

大率――これからせっかく学をすると云う者が、皆、朱子に違うたと云うわけを云う。

○**せつかく**＝折角。力を尽くすこと。骨を折る事。（日国）

高明――なと云うは、いこう器用な知のはたらきある。高上なむまれつきなものは、きっと丁寧な格にはまったことをばせぬ。どうしても知の冴えたものは、其のようなことはくどくどとして、

埒あかぬ様に思うてせぬぞ。

○**いこう**＝一向。ひたすら。　○**むまれつき**＝生まれつき　○**くどくど**＝しつこく繰り返して言うさま、うるさく長々としゃべるさまを表わす語。（日国）

渾厚――又丁寧な、律儀なものは、学はとかく行いじゃ。其のように何もかも知ると云うようなことは、何の益がないと云うて、せぬ。ただ大学一部で済む。大学と云うても、八条目ばかりでよいと云うようになるぞ。これはどれも片ゆきで悪い。その様（に）、無性に云うたものではない。顔子は貧究で、陋巷に居れども、天下を治むることを問われたれば、孔子の四代の礼楽を仰せ聞かされたぞ。ちょうど兵法きらいなものは、兵法は使わずとよい。心さへろくなればと云う。又兵法好きな者は、万事を捨て、兵法でなければならぬと云うようなもの。これはどっちも悪いぞ。本賢のいきは、一心も随分ろくで、さてさて兵法をも知るでのうては役に立たぬぞ。

○**片いき**＝一方にばかりかたよること。かたゆき。（日国）　○**無性**＝分別のないさま。道理のわからないこと。でたらめ（日国）

○**四代**＝『論語』衛霊公篇に、「**顔淵問爲邦。子曰、行夏之時、乗殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆。**」とある。その朱注に、「程子曰、問政多矣。惟顔淵告之以此。蓋三代之制、皆因時損益。及其久也、不能無弊。周衰、聖人不作。故孔子斟酌先王之禮、立萬世常行之道。發此以爲之兆爾。由是求之、則餘皆可考也。『河南程子遺書』巻十七　伊川先生語三に、「三王之法、各是一王之法。故三代損益文質、隨時之宜。若孔子所立之法、乃通萬世不易之法。孔子於他處亦不見説、獨答顔回云、行夏之時、乗殷之輅、服周之冕、樂則韶舞。此是於四代中舉這一箇法式、其詳細雖不可見、而孔子但示其大法、使後人就上修之。二千年來、亦無一人識者。」（理学叢書『二程集』中華書局、一七四頁）　○**ろく**（陸・碌）＝物がゆがまないで、まっすぐなこと。姿、形が正しいこと。また、そのさま。（日国）　直・完・正も当てられる（岩波古語）

※ところで直方は該博をこととする博識の学問を嫌ったが、これは闇斎学派根本の理念とぴたりと一致するのである。たとえば、荻生徂徠は、「嘉右衛門流は、四書近思録小学と立て候ふ分にて、易本義までの学問にて、広く学び候ふを雑学と申し嫌い候ふ」（『学寮了簡書』）と解説批判している。嘉右衛門流は、闇斎学派と言うのに同じことである。言ってみれば、狭く深く書物に沈潜し、人の道を体認自得し躬行する、というのが闇斎学派の行き方であり、

この一派の特色であったのである。博学多識はこの学派においてはむしろタブーであって、〝玩物喪志〟、すなわち心の本来の姿を見失わせる無用の長物にすぎないと看為されていたのである。（叢書日本の思想家12『佐藤直方・三宅尚斎』、明徳出版社、吉田健舟・海老田輝巳、十六頁）

由乎資質――は、その生まれつき得て、（其意智所熟）――その方へ熟する。

日見其趣、毎日、毎日、其の吾、えかたかたへ目がついて、その方の理が見ゆる。

○**え～**＝動詞連用形の「え」が副詞として使われたもの。得る。（岩波古語）○かたかた＝片一方。

不務者――彼才知ある者は、格にはまったことを離れて、吾がままに藺次も無うなるぞ。ちょうど一休の徒のごとし。

○**藺次も無うなる**＝藺次（らっし）は、順序・秩序の意。めちゃくちゃになる。○**一休の徒**＝一休は、室町中期の臨済宗の僧。法名は宗純。別号、狂雲子。後小松天皇の落胤ともいう。華叟宗曇の法を嗣ぐ。京・堺などを転々とした後、大徳寺の住職となり、禅界の刷新に尽くした。また、伝説的な奇行の持ち主として、「一休咄」や、読本「本朝酔菩提」、歌舞伎「鶴千歳曾我門松」などに作られた。（日国）一休の弟子についての参考資料としては、平野宗浄「一休和尚とその弟子達」（禅文化研究所紀要12、禅文化研究所 編、一九八〇年、三月）などがある。一休の弟子たちに、どのような型にはまらない言行が見られたか、また江戸時代において一休の教えがどのように行われたか、実際の例は管見の限り不詳である。『佛教大事典』（小学館、一九八八）の「大徳寺派」の項目を見ると、「室町中期に官刹からはずし林下としての展開をなし、戦国期から近世初期に寺勢は興隆し、江戸中期の調査によると末寺五〇九か寺を有した」とあり、佐藤の時代にも盛んに布教を行っていたかもしれない。ただ、おそらくここでは、数々の奇行や破戒を行ったという一休自身の逸話などによる連想から、型破りであることの例として名を挙げられていると考える。

不力者――又丁寧者はいよいよものを省いて**省約**になる。

安于固陋と云うは、後には何も知らぬ様になる、た■のうしてそれで、ほに学と云うものじゃと覚えてをる。

○**ほに**＝本当に。

其他――先づ悪うなった此二つを挙げたが、これに書き付けたことではない。その外、中々、数えたてられたことではない。何ほどと云うが、きりはない。

各有――今時の誰か流、何流と云うようになったは、学の上にはない筈ぞ。さしあたって嘉右エ門流と云うからがないはづのこと。

○**嘉右エ門**＝山崎闇斎の通称。諱は嘉、字は敬義。　○**からが**＝起点を示す格助詞「から」に、格助詞「が」の付いたもの。体言または、それに準ずるものを受け、「…からはじめて」「…をはじめとして」の意を表す。（日国）

自古――此の段が古からの気の毒ぞ。されども、まだ古には其様（な）だれか流と云うようには無かったが、近年になって、此の気の毒が別して甚だしうなった。

○**気の毒**＝他人の不幸、苦痛、難儀などに同情して心を痛めるさま。（日国）　残念に思うこと。

以故――こうした処が嘆か（わ）しい故、中々、私づれの短才を以て、身の程をも顧みずに、慮外ながら、此の書を編んだ。

○**づれ**＝～のごとき・～のようなくだらぬもの　○**短才**＝才能の劣っていること。才能の乏しいこと。また、その人。また、自分の才能をへりくだっていう。（日国）

収録――さて此の編集したからが、自身の了簡を書いたではない。皆朱子の語で、朝夕講究した中で、精しくはっきりとした語をあつめた。

○**てからが**＝近世以後に見られ、全体で接続助詞のように用いる。逆説の意を表わす。…ても。…したところで。（日国）

欲出入――さて學は明徳新民じゃによって、われはせずにせよではない。先ず此の書を編んだは、我が身に其のような意気にならぬ様にと思うて、戒めにするために編んでおいた。出るにも入るにも、立つにも、坐するにも、此の書を携えて、終身の戒にせんとなり。

○**明德新民**＝『大学』の三綱領のうちの二つ。もう一つは「止至善」。　○意気＝心に溢れる元気。気合。気概。いきごみ。（日国）ここでは、「気持ち」の意か。

至於同志――ここの同志は、さしあたって安正ぞ。

因事――その事につき、その病症によって、此の鞭策を薬にして、此にあててみると、つんと知るる。たとえば、目分トウで、これは十匁有ろう、是れは十五匁有ろうと云うて、上へ下へと云い合うても、一つも埒は無いが、そこへ秤を出して、かけてみすると、どうも云い合うことはならぬ。それと同じことで、我がのは朱子学じゃ、これがのは朱子じゃと云うても、この鞭策をあてて見ると、そのまま知れて、なんのかのと、いろいろのことを云い及ばず、埒明けてくる。

○**つんと**＝全く　○**目分トウ**＝目分量（めぶんりょう）もしくは目見当（めけんとう）の誤りか。　○**どうも**＝いかにも。まったく。（岩波）　○**埒明く**＝決着がつく、片付く。

夫資質――おれはこう、あ（っ）ちはこうと云う様に。その気質の片ゆき、私意の私を云うに及ばぬ。そのまま埒明く。

○**片ゆき**＝偏り。

是乃――これが、今日、この書を編んだ本意ぞ。

恐後日――こう存じよった。端的では、よけれども、ほど経つに従うて、後日にこの心がけを忘れうかと、思うて、気遣いなほどに、此のわけを忘れぬように、此の段を序に記してたもれと、是まで直方の口上に云うてやられた。其の趣きなり。

*余毎歎意、人生賦壽能逮百年者希矣。*其間穉騃戯惰老耄衰懶、殆*居其半、而*天下無無事之人、則其可用力於學者、多不過三二*十年、而*病累憂故不與焉。*倘有從學者、則記問詞藻之好有害其術、*利澤聲名之誘*有奪其志、而*世味經歴之熟又*有薫鑠蠹触乎其中、則*方且淪胥以陷於*鄙僻壞堕之域之不暇、而況於望其有得哉。*設使有脱然能悪世累俗學之陋欲有所自立者。然已無明師良友指示輔導之、則*雖朱子全書具在、而茫不知門庭塗轍之大端、乃何以得實識固守及時進脩以不自失乎。*如此不但背朱子平日之訓、而眩惑擬似之間、將墜彼*詖淫妖妄之説而不自知焉。則其害又復有甚焉者。*是豈不可惜之尤。

余毎――是（ここ）から又　安正の嘆きがあるぞ。人間の寿命、残り多うないように、思うように生きて、百年ぞ。人生七十古来稀なり。然れども、先百年にして、さて其の内を引いてとるぞ。

○**人生七十古来稀**＝杜甫「曲江」に「朝回日日典春衣、毎日江頭盡醉歸。酒債尋常行處有、人生七十古來稀。」とある。

其間――その百年の内でも、先、いこう幼さの時はただ無駄遊びをしておる。此のうちはならぬ。さて又もはや年よって六七十にもなると、又気根おとろえて、ものぐそうなって、もはやならぬ。

居其半、その幼さの内と、老耄を引くと、百年生きると云うものはないものじゃが、まづ百年生きるにしても、其の両方に引くと、半分ひけて、五十年ならでは、学問するひまはない。

○**ならでは**＝しか。（旺文社古語）

天下――さて天下中に、ただ寝てばかりおるものはないぞ。相応に所作の無い者は無い、それに引くと、学問をする間は多い分で、二、三十年ならではない。三二十年と云うても、二三十年と書いても同じことぞ。文章の法で、こう書くぞ。書経などにもあることぞ。

○**書経**＝『書経』無逸に、「或十年、或七八年、或五六年、或四三年」とあるを指すか。

病累――その内に此の類は入れぬぞ。天下中のものに煩わぬ者、不仕合わせのないと云う者もないものぞ。是れにも引けがあれども、これらはその数に入れぬ。これに引くと、いよいよ少のうなる。

倘有――それ程、僅かの間は、学をする暇ゆえ、随分、大切なことぞ。其の内、たまたまこの大切な暇を用いて、学をしようと思うても、その仕方がようやく、今所謂博識の域、さて詩文の学ぞ。どれもしたい、其のように悪（わる）言うてはない。朱子も詩文をも多く書かれたぞ。根に義理が立ちていてすればよいが、山谷や、東坡や、杜子美などのようなは、何に役に立たぬ。今の俳諧をするも同じことぞ。

○**杜子美など～役に立たぬ**＝杜甫の詩を「閑言語」としたのは、程伊川である。「且如今言能詩無如杜甫、如云『穿花蛺蝶深深見、点水蜻蜓款款飛』（曲江）、如此閑言語、道出做甚。」（『程氏遺書』

巻一八、『二程集』、二三九頁）と言う。朱子は、杜甫の詩を愛誦し（『朱子語類』巻一〇七）、『杜詩考異』を著そうとしたが、その暇が無かったと言っている（同・巻一四〇）。

利澤――さては又たまたまするものは、此の大学を読むと、はや後で知行でも取ると云うように、利欲にかかってするか、又はそれぜうそこに此のような学者があってと、ほめられたがってするかぞ、

○**知行**＝「ちぎょう」と訓み、領地・俸禄の意。　○**それぜう**＝「それじょう」＝「それでう」。「それによって」の意。「ぜう・じょう・でう」は、接続詞のように用いて、「～によって、～ので」の意。

有奪――最前、殊勝に学をしようと思い入れた志を、皆、引き奪われた。

世味と云うは、世上のうまい心よいこと。やつし家におるよりは、結構な家におるがよし、悪い衣服を着るより、良いを着るがよいと云う類、（**経歴**）それにひたとふれる、熟するにしたがって、（**有薫鑠蠹触乎其中**）その内をふすべ虫食う様になる、

○**やつし**＝みすぼらしい。　○**ひたと**＝ぴったりと。　○**ふれる**＝触れる。関わる。　○**ふすべ**＝燻べる。煙を立てる。くすぶる。

方且――その方へ陥り沈んで、

鄙僻――におち入りて、そこのさまでは、中々、聖人の学を得ることが成ろうや、成るまい■と。

設使――今でも大勢の中には、まだふっと、藻抜けて、彼の世味俗学のいきを憎んで、ぜひぜひ聖学を窺うてと思うものがあったでも、まづよい師が無し、又友が無いから、どうもなろう様が無いぞ。そのことを云うて聞かする者が、とり違うたことを云うて聞かせては、志はありても、どうも成らぬはずぞ。

○**も抜けて**＝脱皮して、成長して。　○**あったでも**＝あったとしても

雖朱子――四書五経、近思録、語類、文集多たい不足のう、たくさんにあったと云うても、それをわけを云うて聞かせ手が無い故、何処からしてゆくことやら、何処が入口やら知らぬぞ。それから

は、そのことを守り、だんだん時節相応に、進修することもならぬはずぞ。

如此不但――此のようなは、朱子平日の教えに背いたと云うばかりでのうて、何を仕分けたこともなく、うろうろしておる中につい、かの**詖淫妖妄**の説を聞いて、それを信ずるぞ。こちがとくと合点ゆかぬ故、いかさまそうしたこともあろうと、云う様になるぞ。此の害は、又いこう甚だしいぞ。

○**いかさま**＝なるほど

是豈――この段は、さてさて惜しいことぞ。よい師あれば、なにか自立する人ゆえ、いかばかりよくなるに、さてさて、これは惜しいの至極ぞ。

而*今一得此編、潛心熟復之、則朱子教人之要、所始乎立志而終乎爲聖者、粲然明該如白日大路冬縕夏葛不可得而易、而又不可得而闕矣。*由是用力而*益及其全書、*細考篤踐孜孜不已、則向上所詣、其不可測矣。然則此編之成爲今日學者之大幸、亦豈可勝言也哉。

今一得――これは安正かくあいさつぞ。右の通りにはあれども、仕合わせなことには、此の書が出来た故、これをさへ見たなれば、朱子の人を教ゆる、行き方を知ることが成る。其の次第は、まづ**立志**が始めで、**終**わりは聖人になると云うこと、きらりと、明らかに、何処に曇りかかり無う、はっきりとよう知れておる。其のわけは、どうもこれを一つ欠くことも、替えることもならぬ。

由是　この書によって、

益及其全書、この書をさえ見れば、何も要らぬと云う様なは、悪いぞ。この書を見ておいて、その筋を立て、さて朱子の書の文をば、残らず吟味するがよい。

細考――随分、明細丁寧に、考えて、その通りにとっくりと行いて、毎日毎日、間断ないようにするならば、此れ以後、段々上達する処が、何ほどのことになろうやら、計られぬ。切りはないぞ。これで見れば、此の書の出来たと云うは、さてさて意外、学者の仕合わせぞ。その段はどうも言い尽くされぬぞ。

○**とっくりと**＝「篤と」の音便訛。念を入れて、よくよく。

*嗚呼士不學則*無可言矣。*荀有志乎學、不能於此警惺奮勵、而*徒群居終日、聚頭閑議、因循玩愒、*取適目前、*時馳歳去、大耋將至、其從來所爲所得、適不勝其可悔、而悲歎*放曠、*直與蠢植糟粕、共朽腐而止、則亦殊可恥、而*又獨何心歟。是又余之所大歎而深懼者、因遂并書之以庶幾乎*鞭策之益焉。

嗚呼——その上にも一つ気の毒あるぞ。それ故、ああと嘆ず。もちろん学は天子から庶人までするはずのことなれども、その内でも大学の序にもある通り、士は皆、大学へ入るる。町人百姓は器用な者計りを入るる。すれば先ずは、士のするはずのことぞ。

無可言と云うは、そのすべきはずの学なれども、それをせぬ者は、どうもしょうようない故、それには論はかからぬ。

荀有志——せぬ者はしょうこと無し。すわする者の分は、この書をみて、はっきりと気のついて奮い立ちて、せぬと云う者はないはずぞ。

○**すわ**＝すぐに。

徒群居——ただ大勢寄り合って、何の役に立たぬ話をして居りて、ふらふらとして日をくらす。

取適——適は、鼻先の自分勝手なこと、何なりとも、我好きなことばかりして、ふらふらしておる。

時馳——そうふらつきておるを、四時は待ち合わせておると云うことない故、その内に年長けて、其の後には、その仕方を悔いて、嘆き悲しむ。

放曠　暴れて横に出ること。是非に及ばず。推し測かりてもなし。ままよと云うておる。

○**ままよ**＝どうともなれ。

直与——徳のある者の死んだは、天地も惜しみ、人も惜しみぞ。右の如くのものの死するは、ちょうど虫けだもの、草木などの枯れ落つると云う同じことぞ。

又獨——何かそのものじゃと云うても、れきれきさぶらいじゃに、何故に、又、その様になったぞ。これはまたなんとした心ぞや。

○**れきれき**＝はっきり。

鞭策、やはり朱子の語にある、牛馬の鞭と云うことぞ。牛馬の歩きかぬるを、鞭打つと、歩くぞ。一旦、立志でもそれがつい挫けて、進みかねるとき、此の書を、鞭打ちて、追い立てるぞ。

*抑猶有可慮者。*自今學者讀此編而講之能有所警勵興起、則誰不一旦勇進直前以有爲也。惟其及乎*日復一日進歩稍艱鋭氣微沮、則*又安知向之所謂俗習聲利之急世味經歴之熟者、不乘虚投間、引己以入*鄙僻壞堕之域耶。*語曰慎終如始、又曰靡不有初、鮮克有終、*斯言也。既以自爲誦而又為吾丈誦之、又徧爲讀此編者誦之。

貞享甲子九月十五日　浅見安正謹序

抑猶――抑（そもそも）と詞を立て、此の文に又思案了簡すべきこと、あるとなり。

自今學者――今、学者が、この編を読みて、さてもと感心して、志を立てて進みて行うことは、行うが、

日復一日、今日明日と、だんだん月日の立ちてゆくこと、一旦は思い入れて、志を立つるが、どうしても、日の立つに従うて、最前、思いこんだ時のようにはのうて、ちっとは後退（あとじさ）りする気味でけるぞ。そうして腹を立つも、一旦立ちて、さて二三日過ぎては、格別、腹の立ちようが違うぞ。どうしてもその端的の様にはないものぞ。俗に言う、今参三日（いままいり）ぞ、

○**今参三日**＝奉公人の常として、来た当座は忠実に働くが、間もなく怠け出すのが多いということ。（日国）

又安――そう志の挫けた処へ、前に云うてある。俗学世味の外邪が、虚に乗じて、そのひまへ入るぞ。それから、かの卑しい、**鄙僻**――の域へ引き込まれて、一生それですむぞ。

語曰――それじゃによって、始中終、志の変わらぬようにする戒めに、古語を二つ引いた。

斯言也――どうしても、人の志と云うものが、悪うすると、立ち消えしたがる故、此の古語をば先ず自身の戒めのために引いた。さて又直方のためにも引いたぞ。それからうつたつでは、誰云うことなしに、あまねく此の書を見る才の者の戒めに引きたると

なり。

講学鞭*策録

鞭策の二字は、朱子の語にあり。二字ともに、牛馬の鞭と読むぞ。牛馬の歩きの甲斐無い時に鞭でたたくと、足早になるぞ。其のことだ。学者の学に進みかぬるを、此の書を鞭にしてたたき、立て進ますることぞ。書ばかり読んで、志の立たぬ者を追いたつる。今時、何ほど学問しても、歴々の儒者と言われても、其の身の取り回しはかいしきなことぞ。それ故に、脇から学問しても、役に立たぬ、果てはたわけになると云うてせぬぞ。これは傍若無人、めったなことのようなれども、そうでない、したものの様が取り乱したことぞ。それを見て、律義な心から、そう思うは、殊勝な、深切なことぞ。されども、それは性(しょう)が悪うて、あの通りぞ、性さへよければよいぞ。悪いと思うぞ、さて又学問をするから、堯舜のごとくなるはずぞ。もしそうあるまいならば、していらぬものぞとても、此の方は類は堯舜ほどにはなられぬと云うて、せぬは、又いこう短気なことぞ、学をして一分なりともようなると、それほどが、益ふよし、聖人にならぬと云うても、それより下でもよい、人間がいりようもあるぞ、或いは、君子の、善人の、不失令名の、と云うように、段は五つもあるぞ、ちっとなりとも、身をとりあげて死すれば、先祖へ対しても、いかい孝行なり。又一分にも侍の本意と云うものぞ。仏者が仏になりたいと思うとても、一概に弥陀や釈迦のようになることはならぬ、仏の中にも、いろいろ段がある、声聞・縁覚の、菩薩のと云うようにある、丁度同じことぞ。

○**かいしき**＝該識？　皆式？　○**たわけ**＝戯け、馬鹿者。　○**いりよう**＝入用・必要。用いよう。　○**いかい**＝意外、思いのほか。　○**一概に**＝おしなべて。

【二】問爲學*大端。曰、*且如*士人*應擧是要做官、故其功夫勇猛、念念不忘、竟能有成。若*爲學須立箇標準、我要如何爲學。此志念念不忘、功夫自進。*蓋*人以眇然之身與天地並立而爲三、*常思我以血氣之身如何配得天地。*且天地之所以與我者、色色周備。人自汚壞了。因擧「*萬物皆備於我、反身而誠、樂莫大焉」一章。*今之爲學、須是求復其初、*求全天之所以與我者、*始得。若*要全天之所以與我者、便須以聖賢爲標準、直做到聖賢地位、*方是全得本來之物而不失。如此則功夫自然勇猛。*臨事觀書、常有此意、自然接續。（朱子語類百十八、下同）

大端　朱子の語に、たまたまよい語があって、巻頭へとりたぞ。学をする手始めを**問**うと云うことぞ。**端**は、ここからすると云う処のはじめぞ。**大**の字を付けたは、ただはしと云うては軽い故に、大筋目と云うことぞ。そうして大筋目が違うては、何ごともならぬぞ。士は逃げぬと云うが**大端**。学問は聖人になると云うが**大端**ぞ、この大筋目を取り外しては、何ほど学問しても、一生、何のわけもない。一箇の凡俗で暮らすぞ。

且　ものを前に云うて、その上にもと云うことも取る。その時は、又の字の意なり。またしばらくと云うことにも取る。ここは言を起こすことで、さて、と云うこと。

如士人――人の学をするは、ちょうどこれと同じことぞ。

應挙と云うは、唐では及第と云うことがあるぞ。及第と云うは、召し出さるる時分に、なんぞ論題を上から出されて、そのわけを文章に書いて出して、それを吟味する役人ありて、その内の道理をよう云うたものを召し出さるるぞ。これがあちの風儀ぞ。何とやら、異なことのようなぞ。今、日本でも、芸あるものを抱るとても、その芸を見ておこうと云う分には、ちょうど中間のよい伎倆を見ておくようなものとて、ちつと合点あるものは嫌がるぞ。するに、唐では程朱といえども及第をなさるるぞ。これはめされそもないことぞ。されども、これは国風で、こうせねば、奉公することがならぬぞ。故に、いやともにせねばならぬ。好学論が伊川の及第のときの文ぞ。其の及第すると云うはヒツキ■■カ官になりたいと思うから、随分、精を出すぞ、中■■色にあたるの、気が詰まるのと云うことなしに、筋に、毎日毎日、精を出してする故に、ついにはしをふせて、官にもなるぞ。学をするも、ちょうど同じことぞ。聖賢になりたいと云う思い入れが強ければ、病にあたるの、気が詰まるのと云うさしあいはなく、一筋に精を出す、そうするならば、ついには学も成就するはずぞ。

○**中間**＝ちゅうげん。武家の奉公人で、雑役に従事。足軽と小者との中間に位する。（広辞苑）　○**伎倆**＝腕前。手並み。　○**さしあい**＝差し障り。

為學須立――そのごとく学をするには、先ず**標準**の目当てを立つるがよい、どうするで学があろうと、目当てをつけて、その志をそっとも忘れぬように、随分と精を出すならば、段々と工夫も進むはずぞ。

○**そっとも**＝少しも。ちょっとも。まったく。（日国）

蓋――これから学の骨法、尊いと云う処を云われたぞ、和漢ともに学をする者を己に当てて見て、此の通りでないと役に立たぬぞ、何ほど学をすると云うても、皆な無駄ごとぞ、ちょうど日本の御朱印を持って、唐へ行って知行を取ろうと云うようなものぞ、

人以眇然――天地を人に対して見れば、人は至って微かに、小さいぞ、その小さい身をもちて、天地と同様に、並び立ちて、三つになると云うは、中々なりそもないことぞ。

常思――常に思案してみよ。この小さい身で、どうするで、天地と同様になるぞと。平生了簡してみるがよい、

其（且）天地――天地の人に与うるは何に不足なく、何もかも揃うておる、すれば、それを取り延べるなれば、天地は同様になるはずぞ、又気の毒なは、人がそれを汚壊して、けがし傷つけて損なう故ぞ。

萬物――天地の間の道理、一つとして我に備わらぬは無い。それ故、我が身へ立ち返りみて、ちっとも私（わたくし）と云うもの無ければ、人間界に、これほどの楽しみはない、

今之――右のごとくに不足無う、天から生（うまれ）つけたを気質人欲のために、みな汚され蔽われておる故に、学者は随分、勉めて、かの生まれ付けた、はじめへ立ち返るようにするはずぞ、

求全（天）――天の与えた**仁義**――の四つぞ、此の四つで何に不足無う、皆ひっすべておるぞ、それを人欲気質に傷つけてしておるを、最前の通りにま円（まろ）くに、傷つかぬ様にする、

始得　■録字ぞ。そこでよいと云うこと。

要全――天の与えたものを全うしたく思うなれば、聖賢を以て手本と云うこと無うては、いかなる才智の者でも、ならぬぞ。俗に云う、習わぬ経は読まれぬ、と云うようなもの。陸象山・王陽明などが、あのようなたわけ云うは、良知良能じゃと云うて、聖賢を手本とせぬからぞ。あれが文字で書いたもの故、またもとのこうぞと云うぞ。人事へ当てて見よ、いかなることなることではないぞ、ちっと合点ある者は、あの様に、うつけたことにうろたえる■ではない、直道よりせずに、わきひらみずに一筋と云うこと、

○**わきひらみず**＝側辺不見。わき目をふらないこと。ひたすらで

あること。また、あたりかまわず無法であること。また、そのさま。（日国）

方是――三つの通りにするで、そこで最前、天から生まれ付けたものを全うすることなるぞ、

臨事――それぞれのこと努める上、さて書物を見るも、みなこの意でする故、おのづから切れ目も無う続いて行く、そうしてのことに退屈すると云うは、そのことに思い入れが無いからぞ。今、親のかたきを討とうと思う者は、ぞっこん（心底）から思い込む故に、討ちえぬ内はきかぬぞ、

*若無求復求其初之志、無必爲聖賢之心、只見因循荒廢了。*因擧孟子「*道性善、言必稱*堯舜」一章云、「道性善」是説天之所以與我者。便以堯舜爲*様子、説人性善、皆可以爲堯舜。便是立箇標準了。下文*引成覿顔淵公明儀之言以明聖賢之可以必爲、*末後「若藥不瞑眩、厥疾不瘳」最説得好。人要爲聖賢、須是猛起服瞑眩之藥相似，教他麻了一上了、及其定疊、病自退了。又擧*顔子「仰之彌高」一段、*又説人之爲學正如説*恢復相似。且如*東南亦自有許多財賦許多兵甲、儘自好了、如何必要恢復、只爲祖宗元有之物須當復得。若不復得、終是不了。

若無――もしまた本に復るの志もなく、聖賢になりたいと思う思い入れがないぞ。なれば一日一日と志がだらけてきて、よいはよいはと云うて、何事も打っちゃりにするようになる、

因　ちなむと云うこと、いでと思うとなると云うことばに因んで、

道性善――その性善と云うたが、前にある天の我に与えたと云うもののことぞ、

以堯舜――人の本へ復ったと云うが見たくば、堯舜を見たがよい、

様子は、型（かた）と云うこと。人の性善なる故、学びさえすれば、堯舜のように、なるほど成らるると、目当てを足した、本（もと）の悪いものはどうもならぬ。本の善いものの善くならぬ云うことは無い。只今、碁石の黒を擦って白くしてくれよと云うたぶんでは、君の御意でもならぬはずぞ、又白石に墨がつくか、汚れたを、本のごとく白くしてくれよと云われては、なるほど本のごとく白くしてやらるるぞ、人も根が悪い者なれば、どうもならぬが、下地性善の善いものじゃによって、努めさえすれば、ならぬと云うことは

無■。

引成瓏――此の三人は、どれもが、努めさえすれば、なるほど聖人に至らるると云うた訳は、委(くわし)く孟子にある、

末後――さてそれがなかなか物臭うて、不精ではならぬと云うを、いっちしまいに云うた。丁度、病を実に治したいと思えば、強い薬を飲まねば効かぬぞ。身内も痺れる様に強い薬を飲んで、ひたと度重ねて用いるで、そこで病が癒ゆるぞ。人の聖人になるも、艱難為しにくいことをこらえ、ひたとしてでなければ、人欲をかり捨てて、本然の初めへ復ることはならぬぞ、

○**ひたと**＝直と。一途に。

顔子仰之――顔子のつとめて、簡単せぬと云う意を挙げられた、

又説――これから学をすることを**恢復**のことで云われた、士のよう移ることで云われたぞ、同じことでも、町人百姓へは、余りこたえぬぞ、**恢復**は大いにかえすとよんで、仇討(かたきう)ちのことぞ。宋の土地を韃靼から、ひたと攻めて切り取って、その上に宋金二代の君を■トテレタぞ、それ故、その時分ちっとも、伎倆ある者は、恢復のことを云うたぞ、されども、宋の君も、亦は権を執る大臣も、みな臆病ゆえに、恢復を行えば、我々も出ねばならぬ故に、それを嫌がって、恢復のことを進める者は、皆、世の事にかこつけて遠島をさせたぞ、

東南――元(も)と宋の都は西北の方に当たったぞ。それで韃靼から、ひたと攻められて、そこを都することならで、東南の方へ移られたぞ、平家が京を落とされて、一ノ谷に内裏を変えたやうなもの。此の東南の土地でも、せほうも無し。金銀財宝に事欠くこともないぞ。それならば、いらぬことじゃによって、それで堪能しておりそうなものじゃに、何故に恢復と云うなれば、元(も)と我がものなるを、人に取られて取り返さずにはおかれぬぞ。先祖代々、伝わったものを人に取られて、その分にして一分が立たぬより、それ故、取り返したいと云うて、世話を焼いたもの。

○**せほう**＝不明

*__今人爲學__、彼善於此、隨分做箇好人、亦自足矣。何須必要做聖賢、只爲天之所以與我者不可不復得。若不復得、終是不了。所以須要*__講論__學以聖賢爲準、*__故問學__須要復性命之本然、求造聖賢之極、方是學

問。然*此是大端如此、其間讀書考古驗今工夫皆不可廢。因擧「*尊德性而*道問學」一章。

今人爲學――学をするに、あの人よりこの人はよい、ほどよい人じゃに、なぜまた聖人にならねばならぬと云うぞ、なれば、前の恢復の心で、もと天から不足なく徳を我に生み付けておいたものを、気質人欲に奪われておる故、最前の通りに、取りかえさいでは一分たたぬぞ、故に、是非是非、聖人になってと思うぞ、さてこのかたき打ちのことを、士に格別移りのあると云うは、士たる武士（もののふ）には、父兄を人に殺されては、何ほど人が道理を付けても、君の御意でも、共に天を戴かぬのことをせいではおられぬぞ、大ていなことこそ、人の意見や、或いは年よりた祖母の気の毒がらるるのと云うて、やめにもするが、父兄のかたきを打つことは、父のかたわれの母が泣き焦がれて止めても、士たるものは、どうもならぬぞ。嫌でも応でも、討たねば、一分がたたぬぞ。町人百姓には、それほどうつらぬと云うは、父兄を討たれても、悲しいこととは思えども、かたきをうたぬとて、それほど恥ずかしいことも思わぬぞ。さて又、父兄のかたきを打つことは、なほど心力をつくしても、うち遂げぬこともあるぞ。或いは、おり処を知らぬか、我が病気つくか、敵が病死でもすると、討つことならぬぞ。その上、運が悪いと、却って返り打ちになることもあるぞ。この実徳を、気質人欲に奪われておる。さて聖人に是非なりたいと云う。かたき打ちは、それほど心力のいることでもない。あやういこともない。返り打ちにあうこともなし。太極の理の病死と云うことも無い故に、是非とさへ思えば成らぬことはないぞ。これが学を講論し、聖人を目当てにして、是非、取り返そうと思うわけぞ。

○**うつり**＝移り。ゆかり。名残。（大辞林）

故問学――故の字、上の様に云いかけると格別活きるぞ。こうしたことじゃによって、学問は本然の性へ立ちかえって、聖賢になると云うを肝要とす。そこでこれをこそ学問と云うたものぞ。これから見れば、漢唐以来の学者、身は直（なお）さいで詩文にばかりかかっておるを俗儒と云うて、朱子などの笑わるるは尤もなことぞ。さてまた学問してはさつつも、今日よりは明日はよくなり、明日よりは明後日はよくなると云うでのうては、役に立たぬようならねば、毎日毎日、悪うなるぞ。良うも悪うもならずにおると云うことは、天地の間にないぞ。学に高下あるとても、願う処は聖人ぞ。ちょうど下手も上手もねらう処は黒星ぞ。されども中（あた）る処は人々の弓ほど■へぞ、こちは弓かえたじゃによって、黒星はねらうには及ばぬと云うたことではない。学問は聖人を学ぶこと故、なる

まいなればせぬがよいと云うは俗論ぞ。聖人にならぬとても、ようなればよいぞ。丁度、黒星をあてまい、ならば弓を射ぬがよいと云うようなものぞ。そう云うて、大あつちを発す者よりは、小あつちへ入る者はよし。小あつちでも的の近くへ行けばなをよし。ふちやはいよいよよし。あつしを外そうよりよいぞ。

○**さつつも**＝不明。　○**あつち**＝垜・安土。「的」を掛ける場所のこと。　○**ふちや**＝扶持矢。危機を救うために射る矢。「扶持矢を射る」の形で、それとなく危機を告げて助けることをいう。（日国）

此是大端――これは学をする大筋目を云うたもの。此の上に書を読み、古のことを考え、今のはこうこうとこころみること。一つも欠いては、役に立たぬ。さるによって、

尊徳性――挙げられた**尊徳性**は心法の工夫、**道問学**は書を読み、古今を**考験**する方ぞ。どちらが欠けても、よくないぞ。此の話は、立志の語の大筋目をひっつかねたよい語ぞ。これからは皆この語の理を云うたもの。

【二】*昨日所説、爲學大端、在於立志、必爲*聖賢、*曾看得人皆可以爲堯舜道理分明否。又見得我可以爲堯舜而不爲、其患安在。*固是孟子説性善、徐行後長之類。然今人四端、非不時時發見、非不能徐行、何故不能爲堯舜。且*子細看。若見得此分明、其志自立、其工夫自不可已。因擧*執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡、謂*不弘不篤、不當得一箇人數、無能爲輕重。

昨日所説――これも丁度よい説があったぞ。昨日、たんたん云うた処の**爲學**の**大端**は、志を立てて、**聖賢**になることを云うたものぞ。

曾看得――昨日、云うた処は、人みな**堯舜**にならるると云う処のわけをはっきりと**看得**たかと云う心（しん）ぞ。此のような普請がよい普請ぞ。今日の我、人の様なるも、はっきりと知ったなれば、中々このさまではないはずぞ。**孟子**の別に人をだまさるると云うことはないぞ。とかく知り様の甲斐なさにぞ、文字を見て、口移しには言えども、はっきりとは知らぬが為（し）ようぞ。知ったなれば、此の様（さま）ではおらぬはずぞ。今の出家が地獄極楽を云うて、まことにおそろしそうに言えど、あれもはっきりと知らぬ証拠には、いかなる上人・長老・和尚でも、身持ちは掛かったことではない。これも口で云うように、はっきりと知らぬからぞ。孟子などは、な

らるると云うことを、たしかに見てをらした故に、これほどなるに、せぬくちなことに思わるるぞ。丁度、町人百姓などの御前へ出かけぬものは、御近習衆が伏すほどに御前へ出よと云うとき、とっくりと御前のほどを知らぬ故、ふっと■外ものじゃと思■かと思うて、縮けて出かぬるぞ。それを御近習が見て、はて苦しうないに出よと云うても、とかく出かぬるぞ。今日のものの学へ進みかぬるが、丁度、その様なものぞ。孟子は御近習衆のようなものぞ。

○**わけ**＝道理。　○**ふしん**＝普請。造り・造作の意か？　○**かい**＝甲斐。「値打ち・価値」の意。　○**身持ち**＝生計の保持。　○**せぬくちな**＝不明。　○**御前**＝ごぜん。身分の高い人。　○**御近習**＝主君の側近く侍り仕うる役。

又見得――さて又堯舜にもなるほどなられうなものと思い、その上、孟子のだまされずと云うことをよう合点してをるならば、ちっとはなりそうなものじゃに、ならぬと云は、どこぞに支え引っかかりがあってならぬぞと云うを見つけたかとなり。これまたよき疑問ぞ。此のような不審を云うてくれてが無いものぞ。とかく其の病因を見つけると云うことがならぬものぞ。右の手が痛て、おもう様に使われぬは名誉な、何としたことぞとばかり思うて、中風した故、こうじゃと云うことを知らぬぞ。悲しいことぞ。中風と云うを知ったならば、薬をのみ、湯治でもしたらば、治ろうに、そこへつんと気がいかぬ、

○**つかえ**＝さまたげ、障害。阻害要因。　○**めいよう**＝名誉。不思議であること（さま）。奇妙（大辞林）　○**つんと**＝さっぱり、まったく。

固是孟子説――今人も孟子の云はれた性善で、さて**徐行後長者**と云うことならぬではない。又四端もおりおり発見せぬと云うではない。それならば堯舜にもなりそうなものじゃ、似たる一人もなったものは無い。孟子の嘘をつかれたような。そうでない。

子細――このようなことはさっと見ずに、首を折り屈めて、丁寧に見よ。此のような処はっきりと見分けることなると、志を立て、どうもやめうとてやめられぬ様になる、

執徳――論語では、いろいろ文義の詮議あれども、畢竟見込みの甲斐無い、思い入れの少ない、

不弘不篤――そのような人は、学問の人数へは入れられぬ。すれ

ば、その上に、軽いの重いのと云う頓着は無いぞ。

○**頓着**＝心配。

【三】*__從前__朋友來此、某*__將謂__、*__不遠__千里而來、須知箇*__趣__向了。*__只是隨分__爲他說箇爲學大概去。*__看來__都不得力、*__此某之罪__。*__今日思之__、學者須以立志爲本。*__如昨日__所說爲學大端在於求復性命之本然、求造聖賢之極致。須是便立志如此、便做去始得。*__若曰__我之志只是要做箇好人、識些道理便休。宜乎、工夫不進、日夕漸漸*__消靡__。*__今須思量__天之所以與我者、必須是光明正大、必不應只如此而止、就自家性分上、儘做得去、不到聖賢地位不休。如此立志、自是歇不住。自是儘有工夫可做。*__如顏子__之欲罷不能、*__如小人__之孳孳爲利、念念自不忘。若不立志、終不得力。

從前――この段、朱子の弟子衆への便(たよ)りぞ。これより前、かく遠方からみな学■ニワセタからは、

將謂　まさにおもうと訓むがよい。かねてから思うたと云うこと。

不遠――いづれものはるばるの道をしのぎて、学びに参らるる故に、さだめて趣向は知っておられつらうと思うた。**趣向**は聖賢に到るの地位、性命之本然に復るのことぞ。

只是隨分――趣向は知っておられつらう故に、云うに及ばぬと思うて、ただ人に相応に學をする惣体を説いた、

○**つらう**＝つろう。「つらむ」の転。《助動》（完了の助動詞「つ」に推量の助動詞「らむ」の付いたツラムの転）事柄が既に実現したであろうと推量する。…たろう。…ただろう。（広辞苑）　○**惣体**＝総体。

看來――、年来見来たるに、学をしても、どこか一つ直った処もなく、ちっとも學の益が見えぬ、

此某之罪、いづれもはるばる来るほどに、定めて趣向を知れつらうと思うた。これは身どもが、どんな故、こう思うた。これはかたがたの悪いではない。身どもが不調法ぞ。

○**不調法**＝行き届かないこと。

今日思之――、今日、各々の力を得ぬで見れば、とかく学をする

は志を立つると云うが本ぞ。

如昨日――、志を立つるは、こう思えと云うこと。

若曰――、志かい無うて、大ていな人柄になって、道理も大ていなはよいと思う志ゆえ、それからは尤もじゃ段々悪うなるはず。

○**かいなう**＝無駄になる　○**大ていな**＝ほどほどの。普通の。

消靡　消え靡（なび）くと訓（よ）みて、悴（かじ）け縮み、小さくなること。是非と思うてさえ、四身あると、それに引かれて、ならぬものぞ。況んや頭から大抵でよいと思うからは、段々悪いはず。

○**悴け**＝かじける。やつれる。生気を失う。（広辞苑）

今須思量――、天から我に与えたものを本のごとくにせいではおられぬ。中々すこしばかりよいとて、それではおられぬ。いやでも聖賢に至らねば、堪忍してはおかれぬ、想して、人は養いようで、いか様にもなるぞ。今、士の子幼少からして、其のようなことは士のせぬこと、中々そうしたことは士のひけじゃと、下々も云うてきかせ、親も云てきかする故、あの様になりたつぞ。又町人の子はちっとなんぞぎくついたことを云うと、おや下人どもに、町人がそのようなこと云うものかと云う様に、そのあたまをおさえる故、あの如くになりたつぞ。学をするに、うっかりとした心ではならぬ。又今、茸を採るにさへ、不精構えで、屈（かが）むことを嫌がる者は、一つも見付けることはならぬぞ。況んや学をなでまわす様にしてはならぬぞ。

○**ひけ**＝勝負に負けること。負け。遅れ。（言海）

如顔子――、志さえ立つと、やめとうても、やめられぬぞ、石■になる。その証拠に、顔子を引いた。これはよい方へやまぬぞ、

如小人――、小人はまたよること、さわること、少しなりとも、そのえかぬことばかりをするぞ。此は悪い方へ已まぬぞ。俗学は踏み込む意思無しに、ただ口で書ばかり読んで、ふらふらしておる。それ故、成りもすまぬものなり。心も臆病なように見ゆるぞ。それを律儀な衆が見ては、学問すると、却って、たわけになると思うは、余儀ないことぞ。

○**余儀ない**＝やむを得ない

因擧程子云、學者***爲氣所勝**、習所奪、只可責志。又擧云、*立志以定其本、*居敬以持其志。此是五峰議論好處。又擧、士尚志、何謂尚志。曰仁義而已矣。又擧、*舜爲法於天下、可傳於後世。我猶未免爲鄉人也。是則可憂也。憂之如何。如舜而已矣。又擧、*三軍可奪帥、匹夫不可奪志也。*如孔門亦有不能立志者、如冉求非不説子之道、力不足也。是也。所以其後志於聚斂、*無足怪。

為氣所勝――今日の学をせぬものの云いわけの致みは、病気にあたるの、気がつまるの、悪いとは知ったれども、習わしで、そうならぬと云いわけするが、程子はそれを受け取らぬ。それは志甲斐無い故した■と云うた云うのなり。

立志――性根と云うが本ぞ。何ごとをするにも、性根無うてはならぬ。

居敬――敬、耕作の肥やしをする様なもの。何ほど植え付けがよくても、肥をせいでは育たぬ。志が立ちても、敬でちっとはさみたててゆかぬと役に立たぬ。朱子のひたと古語を引かれたは、そうして人々自身の了簡で云うよりは、古人の語を引いて云うと、格別滋味がある。ここでか、皆志を立つるの教えぞ。

舜為法――舜は法を定めて、後世まで伝えられたに、吾丶は又一箇の凡夫でおる。さてさて気の毒なことと思う。それをただ気の毒などばかり思うていては、なんの役に立たぬ。それを憂えば、舜のようにするがよい。

三軍――三軍の大人数をば追い崩すこともなるが、たった一人思い切って、いやと思うは、なんたることにも、その志を引き換えることはならぬ。

如孔門――冉求などは孔門でも七十二人の内で、文字も知り、六芸にも通じたれども、志を立つることはならぬ。ここで志を立てる後はこうなと云うが、よう知るる。

力不足　と云われたが、志の立たぬなりぞ。こうした志じゃによって、季氏に仕えて、何を召されると思うたれば、民の上に、少（し）手を入れて、無性に物を搾り取ることをめされた。

無足怪、異なことじゃ。孔門などでは、あの様には、ありそもないことじゃと怪しむことではない。志が立たぬと云うになると、なるほどこうあるはずぞ。

【四】*學者大要立志。*所謂志者、不道將這些意氣去蓋他人。只是*直截要學堯舜。*孟子道性善、言必稱堯舜。此是*眞實道理。世子自楚反復見孟子。曰、世子疑吾言乎。*夫道一而已矣。這些道理更*無走作。只是一箇性善、可至堯舜。*別沒去處了。下文引成覸・顏子・公明儀所言、便*見得人人皆可爲也。學者立志、須教*勇猛、自當有進。志不足以有爲。此學者之大病。（八）

學者大――とかく万事おいて志の立つるがよい。

所謂志者――その志と云うには、紛れものある故、朱子のそこを念を入れて言われた。気概あると云うさまに、めったに肘張って、嵩押しにして、人へ不遠慮にやっこの意気の様にすることではない、立志と云うは、ぜひ聖賢になりたいと思い入れのつよいことぞ。

○**嵩押し**＝水増し。　○**やっこの意気**＝空元気？

直截――一筋に**堯舜**を学ぶ、そこを**志**――と云うぞ。

孟子道――孟子の嘘を云うたのなんのと云うではない。なるほどならるる偽ない**眞實の道理**と云うことぞ。

夫道――天地の間に道に二つはない。凡人から聖人へ至るは一つの道ぞ。

無走作――此より外はないと云うこと。**別沒去處**と云うも同じことぞ。

見得人人――そうして、素人のならぬならぬと云わしてみぬからぞ。いでと思うて、踏み込んで、ならぬと云うことはない。

勇猛　学者の志は手弱くではならぬ。猛く進んで行くでのうてはならぬ。

【五】**若道**生做一世人、不可汎汎隨流、**須當了得**人道、便有可望。**若道不如**且過了一生、更不在説、**須思量**到如何便超凡而達聖。今日爲鄉人、明日爲聖賢、如何會到。此便一**聳拔**（**聳身**著力言）**如此方有長進**。**若理會**得也好、理會不得也好、便悠悠了。（百十七）

若道――これが志を立つる人の云い分ぞ。此の世に生まれて、何

を道理をわきまえたことなく、ふらふらとしておるは、口惜しいことと思うなれば、

須當了得——人と云うものは、どうしても生まれたものじゃ、どうするが人の道じゃと云うことを知るがよい。ここを覚った人には望みかけらるる。

若道不如——一生を大抵にさえしておればよいと云うような者は、詮索に及ばぬ。

須思量到——とくと思案してみるがよい。どうするで、凡人から聖人へ至らるるぞと、思案をしてみよ。

一聳抜　寒い時分、頭から水をかけられたとき、心のぞっとする様に、心の奮い立つこと、此の下の細注を記す者がよく書いておいた。これが語録潤法ぞ。自身の記すには、此のようなことは書いておくことならぬぞ。

聳身——と云うは、此の語を朱子の言わるる時の態(てい)ぞ。居丈高になって、肘を怒らして、声を尖らして、力を着けて云われた。これなると云う処を云ったもの。

如此方有——此のように、思い込み、踏み込んでこそ、**長進**する処もあるはず。

若理會——合点すればよし、合点せぬとても、その通りと云うなれば、一生ふらふらしてを（以下、欠落）

【六】 *若果是有志之士、只見一條大路直上行將去、更不問著有甚艱難險阻。*孔子曰、向道而行、忘身之老也、不知年數之不足也。俛焉日有孜孜、斃而後已。*自家立著志向前做將去、鬼神也避道、*豈可先自計較。先自怕卻。如此終於無成。（百二十六）

若果是有——つんとこれじゃと云う処を見付けては、まっすぐにしてゆくぞ。あたりを見回して、どうのこうのと思うてはならぬぞ。鵶越を落とすときは、あれに心が着いてはならぬ。ただ一筋に志して落とすでなうてはならぬはずぞ。

孔子曰——道に向かってずっとしてゆく。身老いたの、年の足らぬと云うに、気は使う。ただ息の有るうちは、つとめるぞ。

自家立著――志を立てて、づんづんと進んでゆく者には、鬼神もよけて通すぞ。此の通りなこと、異端の意気とは違った。朱子などのこう言わるるは確かなことぞ。

豈可――中々に懸案（けあん）踏んで、いろいろと思案して見るようでは、なることとではない。

【七】＊**聖賢千言**萬語、無非只説＊**此事**。須是＊**策勵**此志、勇猛奮發、＊**抜出**心肝與他去做。如＊**兩邊**擂起戰鼓、莫問前頭如何、只＊**認捲**將去、如此、方做得工夫。若半上落下、半沈半浮、得甚事。（八、下同）

聖賢千言――いろいろのことを云うておかれたは、此のことばかりを云うたもの。

此事と云うては、何のことやらしれぬが、学者のこのこと云うからしては、凡人から聖人に至ると云うより外のことではない。道にすすむことぞ。

策勵　心のぐっしゃりとせぬ様に、追い立てること。

抜出――気も魂もぬき出す。

両邊――敵味方攻め、太鼓を打ちてかかるときは、矢が来るの、鉄砲が来るのと云うに気が着いてはならぬ。一みちんにして行くでのうてはならぬ。

○一**みちん**＝不明。

認捲――筵（むしろ）などを、片端から巻いてゆくようなもの。

【八】＊**且如項羽**救趙、＊**既渡**、沈舡破釜、持三（日）粮、示士必死、無還心、故能破秦。若＊**瞻**前後、便做不成。

且如項羽――項羽の趙の後つめせられた意気が良い。小勢で秦の大勢にあたる。故に、念あってはならぬ。必死と定めねばならぬ。

既渡――そうして川を前にあてて、戦うと云うが法じゃに、川を渡して、其船どもをみなつき流し、沈めて、釜をうち割って、たった三日が中の糧（かて）を以て出でたぞ。これは士卒の心を一つにするためぞ。どうして後へ還る手は無し。糧が無いによって、三日過ぎ

ると戦わずとも死すると思う故、とても死するものなれば、敵陣へかけ入りて討死するがよいと思い定めて、戦うた故、秦の大勢を打ち破ったぞ。道に至るも、此の合点ぞ。軍で必死を■■■がこれぞ。

瞻前――それに後先を、うろうろと見回しては、なかなか何事も成就することはならぬ。

【九】*陽氣發處、金石亦透。精神一到、何事不成。

陽氣――春先など、つんと柔らかな草が発生するには、固い土や石をさえ生(は)え抜くぞ。陽気の興るは、あの如くに手づよいぞ。今日、人が是非と思い込むことはならぬと云うことはない

【十】*今之學者、全不曾發憤。

今之學者――憤と云うは、なんのならぬと云うことあろうと、はがみをなしてすること。

【十一】*或言、在家*滾滾。但不敢忘書冊、亦覺未免間斷。曰、*只是無志。*若説家事、又如何汨没得自家。如今有*稍高底人、也須會擺脱得過、山間坐一年半歳、是做得多少工夫。只恁地也立得箇根脚、若時往應事、亦無害。*較之一向在事務裏衮、是争那裏去。公今三五年、不相見。又只恁地悠悠、人生有幾箇三五年耶。(百二十一)

或言――**滾滾**と云うは、何やかや事多て、乱れがわしうて、気の毒なされども、書のことをば忘れはせぬ。けれども間断のないようにすることならぬ。此の段、気の毒な。

只是無志、何のかのはない。それは志の無いと云うもの。

若説家事――志さへ立つと、外のことが邪魔にはならぬ。俗務に負けるは、こちの志が甲斐無い故ぞ。徒然草に、明日旅立ちをするとて、仕度するとき、友が来て、月見花見のことを云うに、それに心が染まぬかと云うてある。これが尤もぞ。どうしても心に重荷なることあると、わきのことが邪魔になると云うことは、

稍高底――家事を破ると云いて、仏者の意気とは違う。儒者の山林住居すると云うことは無いが、これはあまり向こうの問が家事

にまけて、家事を大事がる故、それは少々損のゆくことあっても、苦しうない、よい加減にしておけと云うこと。

較之――つんとよいではないが。おてまいの様に、家事に負けておるものよりはよいぞ。

公今――おてまいと別れて、会わぬ間が三五年、久しい間じゃが、またどこに一つよいこともない、ふらふらとしておらるる、大切な月日を、其のようにいたずらにしておると云うことがあるか、人間の一生に三五年と云うものが、其のように幾つあるぞ。一日はかのゆかぬは、一日の遅れになる、一二年怠りたるとて、天地の間にいらぬ年があって、それを埋めると云うことあればよいが、そうした事は決して無い。天地は人が油断しておるとて、待ち合わせておるものは無いに、さてさて油断千万な事。

【十二】*凡人謂以多事廢讀書。或曰氣質不如人者皆不責志而已。*若有志時、那*問他事多、那問他氣質不美。曰、事多質不美者、此言*雖若未是大過、然耶此可見其無志*甘於自暴自棄。過孰大*焉。*眞箇做工夫、人便自不説此話。（百十八）

凡人――すべて人の云いわけに、学をしたけれども、事多うてならぬぞ。又反対の、生まれつきが悪うて、人並みに無い故、中々することがならぬと云うが、是れは云いわけは立たぬことぞ。夫れは志がないと云うものぞ。

若有志――もし志あるなれば、事が多いの、生まれ付きが悪いのと云うにかまうことではない。

問と云うは、ものにかまうことぞ。何ほど暇無しでも、我が好くことはなるものぞ。暇のついえると云うに、振舞うほどついえるものは無いが、好きなればひどいつとめからも、人をもよび、我れもゆくぞ。たばこを好く者は貴賤ともに何ほど忙しい処でも、火を求めてのむぞ。

雖若――事多うてならぬ、質が悪しうてならぬと云うは、さしていかい無調法と云われぬが、よいものになれぬと云うが知れた。何故なれば、志無うて、**自暴自棄**に堪能しておる故ぞ。

○**いかい**＝意外。思いのほか。　○**無調法**＝考え違い。しくじり。
○**堪能**＝飽き足る。満足。

甘と云うは、口惜しいとも思わず、堪能しておる。これで見れば、小さい過ちではない。焉はこれとよむ。意外誤りぞ。

眞箇――一筋にせいともと思うて、つとめるものは、なかなか此のようなことは云わぬぞ。

○**一筋にせいとも**＝一途（一生懸命）にしないでも。

○学ぶは、その性根でしたものぞ。しかれば、いつでもならぬと云うことはない。

【十三】*人之血氣固有強弱。*然志氣則無時而衰。苟*常持得這志、縱*血氣衰極、也不由他。*如某而今如此老病衰極、非不知每日*且放晩起以養病、但自是心裏不穩、只交到*五更初、目便睡不著了。*雖欲勉強睡、然此心已自是箇起來底人、*不肯就枕了。*以此知、人若能持得這箇志氣、定不會被血氣奪、*凡爲血氣所移者、皆是*自棄自暴之人耳。（百四、下同）

人之血氣――人の生まれ付きには、強い弱いは有るが、**然志氣**、士の性根と云うものにはかわりはない。病気なるとて、性根悪うなると云うことはない、

常持得――志さへあるなれば、**血氣**は**衰極**したとても、道へ進むかまいにはならぬ。

如某――朱子はいこう病気にあったぞ。志によって保養のために、**且放**と云うは、何事もつとめずに、打ちやりてせずにおり、朝も遅く起きて、養生すると云うをしらぬではないが、

但自是――そうしては心の内がおちつかぬ。そのはずぞ。今、生きると云うほど、よいことはないが、死すべき処を死せずに生きていては、心ようないぞ、

交到五更――朱子は、明け七の時分になると自然と目が覚めると云う様なもの、心からはうつらぬことぞ。

五更は、七つのかしらなり。**交到**は、五つから四つと云うように、だんだんと時刻たってくること、

雖欲――無理に眠ろうとすることはないぞ。これらは詞と云うものぞ。今でも云うこと、武辺者が、身ども■場へ出ると、何ほど

逃げとう思うても、逃げられぬと云う様なもの。逃げたいと思うては、武辺者ではないぞ。論語にも、顔子の欲罷不能と云うてある。罷めんと思うなれば、顔子とは云われぬ。これはどうもやめられぬと云う処を云うたもの。朱子も、どうも眠らぬと云うことをかく云うたもの。

○**武辺者**＝ぶへんしゃ。武事に関係する人。勇敢な武士。ぶへんもの。（日国）

不肯就枕――枕に就くを心が同心せぬと云うこと。今日のものこそ、何ぞについて、七つ時分になりとも、目のさめたとき、はて気の毒な。今そっとじゃに、寝たいと思うとき、風でも吹いてやかましう寝られぬ。気の毒なと思うて、夜着を着て、息を殺して、むりむたいに寝ようとするぞ。朱子はそうしたことはない。

以此――これで合点してみれば、志あるものの分は、**血気**に奪わるると云うことはないぞ。

凡爲――そうして血気に移さるると云うものの分は、

自棄――の人のこと。これはいこう学者の忌詞ぞ。士を腰抜けと云う様なもの。

【十四】*先生患*氣痛*脚弱泄瀉。或勸晩起。*曰、某自是不能晩起。雖甚病、纔見光亦便要起尋思文字。*纔稍晩便覺似*宴安鴆毒、便似箇懶惰底人。*心裏便不安。須是早起了、却覺得心下鬆爽。

先生患――朱子の一生、病者で貧究にあった。四十七のとき、妻におくれられて、八人の子ども衆を育て、患難めされた。

○**妻におくれられ……**＝「後れる」は、親族や親しい人が先に死に、自分は生き残ること。淳熙三年（一一七六）、夫人劉氏没。

氣痛は、息が胸へさわって痛むことぞ。

脚弱――は、此の内、一色あっても、常人はどうもならぬ。或人が遅く起きてよと云うた。

曰某――身ども自然と朝寝はならぬ。厳しう患うおりと云えども、ちっと明け方になって、明かるを見ると、もはや起きて文字の吟味がしとうなる。

纔稍晩――ちっとなりとも遅いと大きな毒を食うて、大きなせうものになったと思う。

○**せうもの**＝不明

宴安鴆毒は、左伝の字、ちょうど**鴆**を食うたようなと云うこと。

○**左伝**＝『春秋左氏伝』閔公元年に、「狄人伐邢、管敬仲言於齊侯曰、戎狄豺狼、不可厭也、諸夏親暱、不可棄也、宴安酖毒、不可懷也。」とある。「鴆毒」は、もとは毒をもつ鳥の羽を酒に浸してつくる毒。「宴安鴆毒」は成語にもなっており、享楽に溺れひたすら遊び楽しむのは、鴆毒を飲むようなものという意味である。

心裏――心のうちが安うない。早く起きれば、却って心がさっぱりとさわやかな。

【十五】*某平生不會懶。雖甚病、然亦一心欲向前做事、自是懶不得。*今人所以懶、未必是眞箇怯弱。自是*先有畏事之心、*纔見一事、便料其難而不爲。緣先有箇畏縮之心、所以*習成怯弱而不能有所爲也。

（百二十）

某平生――常に不精なこと嫌いじゃ。何ほどわづらうと云うても、ひたと先へ進んで事をつとめる。

今人――今人の不精なと云うも、根っから、つんと不精なと云うではない。

先有――事をしてもみいで、あたまからこれをしたらば、病気にあたろうの、気がつまろうかと、事をしてみぬ先から、そう思うておる故に、病にもあたり、気もつまるぞ。

纔見――ちっとしたことに出合うと、もはや算用つくをして、なるまいと云いて、しかぬるぞ。これ恐れ縮ける故ぞ。

○**～かぬる**＝（動詞の連用形の下に付いて）しようとしてもできない。

習成――生まれつきは弱うはないが、ならぬならぬと云うてせぬが、くせになって、ならぬぞ。心は血気の主人ぞ。家来が怠りても、主人が進めば、下も進むぞ。

【十六】*孔子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎。*看來這道理、須是*剛硬立得脚住、方能有所成。只觀*孔子晩年方得箇曾子。曾子得子思。子思得孟子。此諸聖賢都是如此、剛果决烈、方能傳得這箇道理。若慈善柔弱底、終不濟事。*如曾子之爲人、語孟中諸語可見。*子思亦是*如此。如云、*摽使者出諸大門之外、*又云、以德則子事我者也。奚可以與我友。孟子亦是如此。所以皆做得成。學聖人之道者、*須是有膽志、其决烈勇猛、於世間禍福、利害、得喪、不足以動其志、方能立得脚住。若*不如此、都靠不得。況當世衰道微之時、尤用*硬著脊梁無所屈撓、方得。*然其工夫只在*自反、常直仰不愧天、俯不怍人、則自然如此。不在他求也。（五十二）

孔子曰――忠行の人と云うは顔子の如くぞ。其の様な人は少ない故、それでないぞ。なれば、ただ律儀と何のと云う、捗（はか）が行かぬ故、志ある人をと願われた。**看**　とくと思案してみるに、

○**捗がゆかぬ**＝仕事などがはかどらない。

剛硬――強く脚を踏み立てる者でなうて、成就することはならぬぞ。論語に、士不可以弘毅といえり。

孔子晩年――此象を見よ。どれもが手強い人ぞ。

慈善――心よい、やわらかな、柔和なと云うものは、事の成就することはない。

如曾子――曾子をば、どことなう、むっくりとしたもの、やわらかな人と思うが、論孟中の■て手強い人ぞ、

○**手強い**＝てごわい。しっかりした。

子思亦如此――子思も手強い人ぞ、其事又孟子にあり。

摽使者――**摽**をさしまねくと訓ずるは、いかヰ誤りぞ。ひょうしてと云うことぞ。孟子の註にも、摽は麾也とあり、陣中で采配を振って、人数を繰り出すことに使うた字ぞ。さしまねき、と云う心なれば、使者を座敷へ入れてをいて、我は門外へ出て、これへ御出なされよと云うことになる。こうしたことはないはずぞ。ここは魯君から、あいしらい悪かった故、もはやその使いをうけぬ覚悟、使いを出向いて、それへ御出なされよと云うて、座敷へも入れずに、大門へ押して通り、事をして帰されたと云うことぞ。

其のよい証拠は、名臣言行録に「招之不来」とあり、ここへ来よ、と云うて、招けども、来ぬ、と云うことなり。その対に「摽之不去」とあり。あちへゆけと指図しても行かぬ、と云うことぞ。これで見れば、さしまねくと云うは悪い。摽（ひょう）しと音でよむがよい。

言行録＝朱熹編『五朝名臣言行録』巻二・王禹偁。

○**あいしらい**＝応対すること。もてなすこと。（大辞林）○**名臣**

又云、これも魯侯のよい学友を没（うしな）た。今からはこなたを学友にしようと云われたれば、私を友にとは過ぎた徳でいえば、こなたは私の下知を受けるはずの人じゃと云われた。此の様なことが意外、不躾なことぞ。子思などの言われそもないことじゃが、そうした道理有ると見えた。それなればこそ、道統の、子思の云いて、孟子の夫れを尤もなと咄て、朱子の同心して、注をしておかれたぞ。今日でも、仏道を信ずれば、いかなる卑しき者でも、悟道の上人と云うなれば、歴々の大名がたつはい召さるるぞ、これで見れば、徳を信ずると云うになっては、我、事うるはず、と云われた。妄言ではない。

○**たつはい**＝答拝（たっぱい）。大饗の際など、身分の高い人が来臨した時に主人が堂を降りてともに拝礼すること。転じて、丁重なお辞儀。とうはい。または、手厚いもてなし。丁重な取り扱い。立派な待遇の意。（日国）

須是有膽志――聖人の道を学ぶ者は、肝太いて云うでなければならぬ。

不如此――こうないと、すすきの穂を砂の上に立てた様にぐにゃする。

硬著――背中骨を強う立て、屈（かが）みたおむまいと思うでなければならぬ。

○**たおむ**＝撓（たお）む。曲がる。たわむ。（大辞林）

然其工夫――此のように云うと、腕こきの貴人にも、かまわぬ、益体（やくたい）無しが、志ある様に、紛れたがる。日本にも昔から武勇の者あれども、

自反縮――と云う者はない。義経ほどな勇者はなけれども、その身へ立ち返ってみると、人前で云はれぬ竦（すく）んだ処あるぞ。

【十七】***與或人説**、公平日説甚剛氣、*到這裏爲人所轉、都屈了。*凡事若見得了、須使堅如金石。（百二十一）

與或人説――朱子の弟子に気弱なものに驚く者あると見えた。それへの話。そちは、普段には強手なことではならぬならぬと云う。

到這裏と云うはなんぞ。大事らしいことあると、もはやうろたえる。

凡事――こうするはずと云うを見付けたならば、石や金の様に堅うするがよい。

【十八】*學者不立則一齊放倒了。（八）

学者――踏み立つる意思ないと、何もかも倒れる。

【十九】*學者當常以志士不忘在溝壑爲念、則道義重而計較死生之心輕矣。*況衣食至微末事、不得未必死。亦何用犯義犯分、役心役志、營營以求之耶。*某觀今人、因不能咬菜根、而至於違其本心者衆矣。可不戒哉。（十三、下同）

學者――志ある士は、どこでなりとも、死んで、溝堀に捨てられても、かまいないと、思うがよい。そう据わると、**道義**が重くなって、**死生**をいろいろ**計較**する心軽くなる。

況衣食――大切な命さへ、こう思うからは、まして衣食は命に対すれば、かすかな末なことぞ。衣食の結構なを得ぬとても、死ぬるものでもない。

某觀――いかようなものなりとも、食うておろうと云う合点ない故、本心に違うて取さがしたことでするもの多し。まだ■いてかなわぬこと。

○**合点**＝覚悟。

【二十】*人最不可曉。有*人奉身儉嗇之甚充其操、上食槁壤、下飲黄泉底、却只愛官職。有人奉*身清苦而好色。*它只緣私欲不能*克、*臨事只見這箇重、都不見別箇了。*或云、似此等人分數勝已下底。*曰、不得如此説、才有病、便不好。更不可以分數論。只*愛官職、便弑父與君也敢。

人最――今云う、人ほど合点ゆかぬものはないと云うと同じ、

人奉身――身もちを平生倹約に、質朴にするの覚悟には孟子に云うた、土を食い、水を飲んでおろうと思う。それならば何も求めないかといえば、よい役や位になりたがる。

○**しつはく**＝質朴（しつぼく）。倹約、節約をすること。またそのさま。けちであるさま。（日国）

奉身清苦――無欲にして傲らぬものでいて、色を好む方ではらつしも無う、とりとかすがある。

○**らつしも無う**＝藺次（らつし）は「順序・秩序」の意。めちゃくちゃになる。　○**とりとかす**＝不明。

它只――何故にそうあるぞ。なれば好きと云うものあるに、**克**ことならぬからぞ。

臨事――そのもの好きに出合うと、それが、いこう重う見えて、その方へ惹かるる。

或云――これは小成に安んずるすじから云うた。好色が悪うても、清苦なと云うようなは片々よいになって、何もかも悪いと云うには勝った。それよりはよい。

曰不得――こう問うは我もその内へ入りて、その流れになっておる合点で問う故、そこを朱子の断たれた。ちょっとなりとも悪いことあると、役に立たぬ。紙に油ついた様に、それがだんだんに広がる。その上にちょっとよいのなんのと云う吟味に及ばぬ。

愛官職――ちっとなりとも、我よりよくなりたい、よい役をしたいと云う心あると、君父をなみすることもしかねぬとなり。これは合点ゆかぬことじゃが、朱子のかく言わるるからはそうと見えた。今、歴代で考えてみれば、主を殺し、父を殺すことをば、みなよせいになぐさみではない。君父を弑すれば、その国知行を取る故、弑すぞ。三好や明智が如きも、弑すると、あとで天下を取ると云うことある故ぞ。信玄の信虎を追い出したは、弑したものぞ。夫れをあれは殺すはせぬ。追い出したと云うはあまり律儀な云分ぞ。信玄も甲斐一国でしまおうと思うと、父をも追い出さず、子供をも殺さぬぞ。どうしても合戦をして人の国をとりたいと云う処あるからぞ。今日ちっとなりとも、ようなろうと思うには、傍輩をも突き倒してゆく意気でのうてはならぬぞ。これから見よ。官職を愛すると、君父をも殺しかねぬと云うは、なるほどそうあ

ろうことぞ。

（続く）

キーワード：佐藤直方・講学鞭策録・講学鞭策録講義・日本朱子学・崎門学